2020年9月15日 信濃毎日新聞の東信版

オンラインで共有

コロナ状況下における軽井沢の芸術文化（2020年夏FIACSシンポジウム）

コロナ下の芸術について画面越しに語り合ったオンラインシンポ

軽井沢

「芸術で癒やす役割担う場に」

軽井沢町などのまちづくりを研究する一般社団法人「国際文化都市整備機構」（事務局・東京）は12日、芸術振興をテーマにしたオンラインシンポジウムを同町などで開いた。機構理事長で元西武百貨店社長の水野誠一さんや町内外の芸術家らが参加し、新型コロナウイルスの影響や今後の展望を語り合った。

坂城町出身の現代アーティスト小松美羽さんは「瞑想（めいそう）した状態で取り組んでいる」と自身の制作方法を解説。コロナについては「芸術は心や魂を癒やす薬の役割がある。多くの人が今後、芸術を求めると信じて、今は描き続けている」と話した。

建築家の団紀彦さんは、コロナ下で軽井沢町のセゾン美術館に展示した野外の茶室などを紹介した。同機構専務理事の井口典夫・青山学院大教授は「困難な状況でこそエネルギーをため、作品を生む役割」を芸術家に期待した。

同機構会長の鳩山由紀夫元首相は「コロナの時代こそ文化芸術が大事。緑が豊かで文化が際立つ軽井沢はその振興の場所にふさわしい」と話していた。

機構は企業関係者や大学研究者らが2016年に設立。景観保全、芸術振興などを目指し、調査研究をしている。